

# 日本書紀の敬語

——「奉」をめぐる——

榎 本 福 寿

一、はじめに

二、「奉」の分類と書紀の分巻

三、各 説

(一) 献上 (二) 承受 (三) 奉仕 (四) 謙讓 (五) 右以外

四、I群の位置づけと全体のまとめ

一、はじめに

日本書紀(以下には書紀と略称する。本文は新訂増補国史大系本により、とくに断らない限り、字体は通行のものにしたがう)の文体を純漢文体ないし正格の漢文体と規定するのが通例であろう。そうしたいわば包括的な規定が一般に行なわれる一方で、三〇巻にも及ぶ書紀の、その内部がグループごとに分かれるという指摘も、これまたしばしば繰りかえされている。包括的な文体規定とグループごとの分巻とは、はたして矛盾なく両立するのか。書紀は、そ

もそも統一な文体で記述され、そのうえで、グループごとに異なりをみせるのであろうか。

右のような問いをめぐって、かつて、ささやかな論考を試みたが、いま、それを要約すれば、あらまし次のとおりである。すなわち、包括的な文体規定を許容しない程に、グループごとの違いが著しい。そしてグループによっては、純漢文体とか正格の漢文体とかの規定にもとる修辭上、あるいは語法上のあらわれが目立つ。それと異なる別のグループでは、漢籍中の文辭を積極的に利用し、なおかつその利用にあたっては、原文をほぼ一様に対表現へ改変するなどの意図的な志向をみせる。純漢文体などの規定をもし使うとすれば、このグループの文体にこそふさわしいということ、以上である。

書紀がどのように記述を成りたてていたのか、その実態は、古事記のそれ（が明解に論じられているの）<sup>⑨</sup>とは対照的に、いぜんとして明確な像を結んでいない。「純」や「正格」などという文体規定は、書紀の記述が漢語・漢文より成り立っていることを前提としているのであろうが、いったんその記述を個々の漢字の連続としてみた場合にはたしてそれは、本来の漢語そのままであるのか、またあるいは、和訓にもとづくその漢字表記、すなわち正訓字であるのか、そのことの検証なくして、文体をいくら規定してみたところで、ほとんど意味をなさない。なによりもまず、書紀が漢字をどのように使用し、その記述を成りたてていたのか、個々の語（漢字）にそくした実態の解明が急務であろう。旧稿は、その足がかりに過ぎないが、右に概略を摘記したなかという純漢体の規定がふさわしいグループと、然らざるとの二つのグループ相互の異なりは、漢字の使用それ自体の違いに深くかわるものであったのではないか。言い換えれば、その違いが文体の異なりに結果したのではないか。さしあたって、こうした観点から、書

紀の記述の成りたちを探ろうとする。

さて、漢字使用の実態を見きわめるうえで、敬語は、きわめて示唆深い。日本語の敬語と中国語のそれとが、語彙にせよ、その表現にせよ、たがいに異なる以上、敬意をあらわす場合には、ごく大雑把にいつて、日本語の敬語を漢字を借りてあらわすか、または、中国語の敬語にそのまま従ってあらわすかの、基本的に、この二つのうちのいずれか一方を採ることになる。古事記には、前者の方法による例が少なくない。

(1) 神夜良比夜良比賜。(上16オ)<sup>⑧</sup>

(2) 開<sup>ニ</sup>天石屋戸<sup>ニ</sup>而刺許母理坐<sup>也</sup>。(上19オ)

(3) 如<sup>レ</sup>拜<sup>ニ</sup>吾前<sup>ニ</sup>伊都岐奉。(上48ウ)

音仮名が日本語（の音節）をあらわすのと同じように、傍線を付した「賜」「坐」「奉」も、それによって日本語の敬語、すなわち補助動詞のそれぞれ「たまふ」「ます」「まつる」をあらわしているはずである。それら敬語に相当する意味を、漢語本来の「賜」「坐」「奉」はもたない。古事記の漢訳本（人民文学出版社）で、「賜」以下をいずれも訳出していないことは、二つの言語間の違いを端的に物語るであろう。

こうして敬語においては、日本語と中国語との乖離が著しいだけに、それだけ、そのいずれの語にもとづいて記述するかによって、表現そのものにも決定的な違いが生じる。古事記のように、みかけはともかくも漢文でありながら、その実態にいたっては、日本語にもとづいて——とはいえ、仮名書きを除けば、和訓をもつ漢字のその和訓の限りであろうが——記述する方法を基調としていれば、日本語の敬語が、さまざまに、しかも数多くあらわれる。書紀との違いはそこに著しいが、さて、その書紀には、前述のとおり純漢文体の規定がふさわしいグループと然らざると

の、少なくとも二つのグループがある。グループ相互の特質の違いが、敬語の使用には、とりわけ直截的なあらわれをみせるはずである。その敬語の使用をとおして、書紀の記述の成りたち、ことには、二つのグループ——後に言及するように、あるいは三つのグループ——の、それぞれの漢字使用の実態などを検討する。これが、小稿とそれにつづく別稿とのおおよその輪郭である。

## 二、「奉」の分類と書紀の分巻

さて敬語のうち、書紀の全巻をとおして最も使用頻度の高い用例は、「奉」である。しかも頻出とは別に、この「奉」には、日本語をあらわす漢字表記、すなわち正訓字として使用する場合と、漢語そのままに使用する場合とで、あらわれを異にするなどの特徴もある。漢語として使用したなかには、敬意を認めがたい用例もあるが、それらを含め、小稿では、「奉」のすべての用例を取りあげて検討を試みる。

まずはじめに、「奉」の全用例の数をかざえと、三〇四例ある。古事記の用例が全体で五五例であるから、そのおよそ六倍弱、書紀における「奉」の使用は、積極的かつ多岐にわたる。したがってまた、そのあらわれも多様である。そうした点では、古事記の用例は、ほとんど比較にならない。ここで便宜、ひとわたり古事記の用例についていえば、その用例は、単独の場合には「爾持<sub>ニ</sub>其矢<sub>一</sub>以奉之時」（上29オ）などの献上の意をあらわすものに限られ、また一方、他の語（動詞）と熟合ないし結接する場合でも、その意をあらわすか——たとえば「奉出」（上51オ）「奉進」（上21ウ・下22オ）など——、もしくは謙讓の敬意をあらわすかの——「奉」の用例は、これが大部分で、なおかつそのうちの半数以上を「仕<sub>つかまつる</sub>奉」が占める。この傾向は、万葉集でも同じ——、二つにとどまる。つまり、

意味のうえで、献上の意と謙讓の敬意との、この二つをあらわす以外にはない。

書紀の用例は、もとよりそうした限定のうちにはない。出典をもつ例をはじめとして、漢語をそのまま使用した例なども多い。「奉」を積極的に使う以上、あらわれが多様であって当然であろうが、その全用例を意味の違いによって分類すると、およそ次の五つの項目に分けることができる。

(一)物を献上する意味をあらわし、日本語の「まつる」ないし「たてまつる」にあたる。

(二)事物を承受する意味をあらわし、日本語の「うく」ないし「うけたまはる」にあたる。

(三)奉仕の意味をあらわし、日本語の「つかふ」ないし「つかへまつる」にあたる。

(四)謙讓の敬意をあらわし、日本語の「まつる」ないし「たてまつる」にあたる。

(五)右以外の全て。

五項目に分類したとはいえ、「奉」の意味が五つに分けられるというわけではない。四までに分類しきれない用例を(五)に一括したまでの、いわば便宜的な措置にすぎない。

なお各項目の用例について付言すれば、(一)(二)(四)の各項目の「奉」は、それぞれに付記した日本語をあらわす正訓字として、万葉集や古事記、宣命などに、あるいはそのいづれかに用例がある。しかし、(五)に分類した「奉」の場合には、それらの文献にも正訓字としての用例がない。(一)もまた同様であって、そこに付記した日本語は、意味的にその「奉」に相当するというだけに過ぎない。(二)と(五)と、いずれの「奉」にしても、正訓字としての日本語との対応的な関係をもたない。これらにあっては、後に示すとおり、出典をもつ例があるほか、漢語そのものか、もしくはその応用とみなしうる用例が大勢を占める。

右の(一)~(四)の分類に従い、三〇四例にのぼる「奉」のすべてを各項目にあてはめて、そのあらわれを数字で示したのが次に掲げる表である。表中、単とは単独用字を、また熟とは熟合用字を、それぞれ示す。<sup>⑧</sup>

計	(四) 謙讓	(四) 右以外	(三) 奉仕		(二) 承受		(一) 獻上		卷
			熟	単	熟	単	熟	単	
15 29	7 18		2		1	1	2 3	4 6	一 二
44									
6 1 1 1 2 1 11 3 2 1 8	2 1    1 1 1  1			1     1	1  1     2  1 4	1      2  1 1	1   1    2  1 3	三 四 五 六 七 八 九 十 一 二 三 三	
37									
15 22 3 11 9 27 15 12	2  3  3 1	5 9 1 8 2 9 9 5	1  1   1 2 2	1 3   2 4		3 4 1  3 9 2	3 1  4 1 1	2 3   2 1	一 四 五 六 七 八 九 十 一 二 三
114									
2 1 3	1					1		1	三 三 三
9 34 7 12	3  3	3 13 2 4	1  2	1 2	3	2 7 3 3	2  2	1 5 2	二 四 五 六 七
62									
3 7 10	1  2							2 5	六 元
34	1 11	5	1	1	6	4	5		三

表中の数字の限りでも、巻ごとにその多寡に違いがあり、しかもそれが群をなしていることが知られるであろう。すなわち巻一・二のいわゆる神代巻では、(一)と(四)、とりわけ(四)の項目の数字がとびぬけて高い。巻三以降とは明らかに一線を画している。巻三以降では、巻一三までの各巻と、巻二二・二三・二八・二九とがそれぞれ全般にわたってきわめて低調である。巻一四から巻二一までと、巻二四から巻二七、さらに巻三十とは、それらとは対照的に、いず

れの項目にも積極的なあらわれをみせる。これらの巻のいくつかは、また、(四)の項目の用例をもつ。こうしたあらわれの違いをもとに分類してみると、書紀三〇巻は、次の三群に大別できる。

I 群——巻一・二

II 群——巻三・一三・二二・二三・二八・二九

III 群——巻一四・二一・二四・二七・三〇

ところで、用例のあらわれをもとに三群に分けてみて、疑問や問題がないわけではない。分類にともなう困難はもとより、それぞれの群のなかに、その群の傾向や特徴からはずれた巻があり、それらの位置づけが問題となるほか、そもそも、数字それ自体がはたして群に分ける程に有意的であるのか、そのことを確認するうえでも、個別的な用例の検討を欠くことはできない。そこで次には、右に分けた三つの群をひととおり前提として、(一)～(四)の各項目について、各群ごとに用例をとりあげ、それらの相互比較・検討を通して、それぞれの巻の位置や各群の特質などを見極めることにする。

なおI群については、巻一・二の二巻しかなく、群として一括した場合に、II III群との間に、所属巻の数に大きなひらきがあつて、群ごとに用例を比較する際には、いちいちそれを勘案しなければならないなど、煩瑣な処理を必要とするうえに、三つの群をあわせて取りあげた場合には、記述が煩雑になるなどの懸念も、もちろん無しとしない。したがって次章以下では、まずはII III群に限って検討を試みる。I群は、のちに、その結果を踏まえながら検討する。便宜にしたがうまでで、そうした措置を構じても、結論には、ほとんど影響ないはずである。

### 三、各 説

#### (一) 献上

まず(一)の項目であるが、献上の意味をあらわすこの「奉」の、はじめに単独用字からみるに、各巻、またⅡⅢ群をとおして、とりたてて顕著なあらわれの違いはない。そもそも献上の意をあらわす漢字としては、「献」「貢」「上」などの、いわば常用的な用字があり、「奉」の使用は、それらを一方において選択したその結果であつたはずである。そうした点では、各群ないし各巻でのあらわれに、もっと違いがあつて然るべきであるにもかかわらず、それが顕著でないのは、「奉」が「献」以下の用字とほとんどかわりない常用性をすでもち得ていたからであろう。古事記にその用例が少なからず(七例)あるうえに、万葉集にも、正訓字としての用例、たとえば「天漢瀬每幣奉」<sup>(つたてまつる)</sup>(2069)などがあるほか、漢語そのままの「臨紙懷断、奉状不備」<sup>(4073の題詞)</sup>などもある。「奉」の単独用字が、かくて、すでに常用的に使われていたことは推測に難くない。書紀での使用も、通常「奉」を使うその使い方——正訓字・漢語のいずれであるにせよ——と異なるはずもなく、そうして常用的な使い方をひきついだ結果、比較的偏りのないあらわれを呈したものと思われる。

一方、熟合用字では、用例のⅢ群への集中が著しい。こころみに再出以上の例に限って、そのあらわれをみると、次表のように、総数が多いだけでなく、字種もまた豊富である。熟合用字として「奉」を使うことにⅢ群が積極的であつたその結果とはいえ、Ⅲ群の特徴としてそれを捉えるうえでも、この熟合用字の性格についてひとわたり押えておかねばならない。



群	Ⅱ (3)	奉進	卷六 (1)	二 (1)	二 (1)	二 (2)
		奉獻	卷三 (1)	一四 (3)	一六 (2)	一九 (1)
	Ⅲ (14)	奉上	卷九 (1)	三〇 (1)	二一 (1)	二四 (1)
		奉貢	卷九 (1)	六 (1)		

まず古事記をみるに、該当する用例は、次の二例しかない。しかもそのいずれも、

種種作具而進時、——為穢汚而奉進、（上21ウ）

故可<sub>レ</sub>貢。——隨<sub>二</sub>大命<sub>一</sub>奉進。（下22オ）

前出例の字面を変えた、いわゆる漢文の避板法にもとづく——ちなみに第二例は、さらに「貢獻」に改める——用字である。万葉集では歌の表記には該当する例がない。ただわずかに一四八番の歌の題詞に次の例があるに過ぎない。

一書曰、近江天皇、聖躬不予、御病急時、太后奉獻、御歌一首

その集中ただ一つの「奉獻」は、右のように「一書曰」というなかにある。けれども、この題詞は、直前の一四七番の歌の「天皇、聖躬不予之時、太后奉<sub>レ</sub>御歌一首」という題詞に引き続いて、ほぼそれと同じ内容をあらわしていることが明らかであるから、「奉獻」が、その「奉」と同一の字面を避けるという意図による用字であったことも考えられる。推測の限りではないが、それがもし避板法にもとづくとすれば、古事記とその使い方において共通することとあいまって、熟合用字それ自体に特徴的な性格を物語るであろう。すなわち漢語的性格である。

もとより単独用字の「奉」も漢語には違いない。しかしそれは、前述のとおり正訓字でもある。熟合用字にしても、和訓をもち、その和訓をうしろだてに用いられていた可能性は否むべくもないが、それにしても、右のような限定的な使用にとどまっていたのは、古事記に限っていえば——そこでは和訓をもつ漢字の使用が原則であり、漢語そのままの使用は極力抑えられていたはずで——、なおそれを漢語とする意識に制約されていたからではないか。もしそうであるとすれば、この熟合用字の多寡は、ただ単に数的なあらわれの違いを示すにとどまらない。用例の少ないⅡ群は、寡少そのことにおいて古事記と共通するばかりでなく、漢語そのものの使用を控えるといった、表現の基調までも等しくしていたとみることも可能となろう。Ⅲ群は、また逆に、漢語の積極的な使用に特徴をもつとみることが出来る。こうしてなお推測の域を出ないが、それでもⅡⅢ群のそれぞれの基調あるいは特徴は、あきらかに違う。その違いが、次項以下ではいっそう著しいあらわれをみせる。

## (二) 承 受

この(二)の項目に該当する用例は、承受の意味をあらわす「奉」である。日本語としては「うく」ないし「うけたまはる」が対応するけれども、それも意味のうえでの対応にすぎない。「奉」は、それらの正訓字とはみなしがたい。単独用字「奉」が対象(目的語)とするのは「詔」「勅」「命」などが大半を占めるが、いま、便宜にしたがって、「奉」と同じようにそれらを承受するということをあらわす日本語とそれをあらわす正訓字とをひとわたりみるに、まず万葉集では、「彼も此も命受牟跡く東の中の門ゆ参り来て命受例婆」(3886)の「受」と「かしこきや美許等加我布理」の「かがふる」との二語以外にない。きわめて少ないとはいえ、古事記また同様であって、その二つの例以外にはない。

故、受<sub>レ</sub>命罷行之時、（中40ウ）

故、受<sub>レ</sub>命以貢上人、（中62ウ）

不<sub>レ</sub>受<sub>三</sub>勅命<sub>一</sub>曰、（下22ウ）

其年其日、被<sub>三</sub>天皇之命<sub>一</sub>、（下28ウ）

ほかに統紀の宣命には「うけたまはる」の例が多いが、それには、もっぱら「受賜」「受給」あるいは「受被賜」などの表記をあてる。いずれにしても「受」ないし「被」のほとんど専用である。恐らくそれは、「法隆寺金銅薬師仏造像記」（寧楽遺文・下962頁）に「大命受賜而」とあるように、古くからの慣用に根ざす表現であったに相違ない。

そうした慣用的な表現とそれをあらわす表記とがあったからであらうが、古事記や万葉集、さらには宣命などにも「奉」の用例は絶えてない。つまり、日本語にもとづいて表現するか、もしくはそれを基調とする限り、「奉」を使用するまでもなかったであらう。それは、まさしく漢語であった。書紀が漢籍を利用したなかに、その出典のままの表現として「奉詔」がある。

群臣皆曰、「皇后為<sub>三</sub>天下<sub>一</sub>計、所以安<sub>三</sub>宗廟社稷<sub>一</sub>。（中略）頓首奉<sub>レ</sub>詔。」（九245）

出典は漢書の高后紀（卷三）であるが、この「奉」の使用は、漢語としてはむしろ通常の用法による。もちろん、その用例も、漢書以外に数多くみることができる。

そしてその漢語「奉」をそのまま使用したことの明らかな用例が、書紀では、Ⅲ群に集中してあらわれる。「奉」が対象とする語にしたいが、用例を整理して示すと、次のとおりである（なお右に掲げた出典をもつ例は除く）。

群	勅	詔	命	その他
	卷四 (3) 一六 (3) 元 (7) 二六 (2) 二七 (1) 三〇 (6)	卷五 (1) 元 (1) 二〇 (1) 二五 (1) 二七 (2)	卷三 (2) 三 (1) 五 (1) 六 (1) 二〇 (1)	卷三 (1) 九 (1) 二 (1) 三 (2) 五 (2) 元 (1) 二四 (2) 二五 (6) 二六 (1)
Ⅱ群 (8)				
Ⅲ群 (43)				

全般にⅢ群での用例がきわだって多い。そのなかでも、「勅」「詔」を対象とする「奉」は、Ⅲ群をとおして頻出している。いわばⅢ群を特徴づける用例といっても過言ではない。したがってそれらは、Ⅲ群が漢語による表現を基調としていたことを強く示唆するであろう。

ところで「命」においては、一見してⅡ群との近さを思わせる。けれども、Ⅱ群のその用例のうち、「不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>命」(一三352、大泊瀬皇子の求婚の「命」)以外では、「不<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>命」(一二353)「奉<sub>レ</sub>命」(一二163)の双方とも、「勅」あるいは「詔」に相当する、つまりは天皇命であるのに対して、Ⅲ群のそれは、「奉<sub>二</sub>兄<sub>一</sub>命」(一一5407)「奉<sub>二</sub>太子<sub>一</sub>命」(一一62)とあり、「勅」や「詔」では本来ありえない内容をあらわす。残る一例は、割注にある。

遣<sub>二</sub>(二人一略)一宰<sub>三</sub>於百濟国<sub>一</sub>。王人奉<sub>レ</sub>命、為<sub>二</sub>使<sub>三</sub>三韓、自称<sub>二</sub>為<sub>三</sub>宰。蓋古之典乎。如今言<sub>レ</sub>使也。余皆倣<sub>レ</sub>此。(以下略) (二〇107)

右のように本文の記述を説明した一文にあり、その「命」は、具体的には「勅」や「詔」にあたるものの、表現上それらを一般化した言い方であるように見受けられる。恐らく説明の便宜にしたがって使ったはずであるから、ひとまずこれを除くと、Ⅲ群の用例は、結局、前二例となり、既述のとおり、そのいずれも天皇以外の者の、つまりは「命」

をその対象とする。天皇の場合には、それにふさわしい「勅」や「詔」を使い、それ以外の者に「命」を使う、「奉」の使用にあたっては、Ⅲ群では、原則的にこうした使い分けを行なっていたとみることができる。

一方、Ⅱ群では、使い分けを行なっていないばかりか、天皇の場合にも「命」を積極的に多用し、その用例の数は「勅」や「詔」の比ではない。しかも、それらの使い方が古事記や万葉集でのそれとあい通うといった特徴をもつ。日本語にもとづく使用を推測させるそうした特徴については、別稿<sup>⑩</sup>で指摘したが、「命」が承受の意味をあらわす語の対象となる例も、もちろん少なくない。

被<sub>レ</sub>命——卷五(2)・一二

被<sub>三</sub>天皇之命——卷七

被<sub>三</sub>天皇命——卷一三

受<sub>三</sub>命天朝——卷六・七

受<sub>三</sub>太子命——卷一二

承<sub>レ</sub>命——卷三・一三

承<sub>三</sub>天皇命——卷七

承<sub>三</sub>宝命——卷二二

「奉命」は、かくて、Ⅱ群にあつては、「被命」「受命」「承命」などの、「命」を承受するという場合の一連の表現の一つでしかない。そのうち、上述のとおり「被」は「かがふる」をあらわすと考えられるが、それ以外の「奉」「受」「承」は、いずれも「うく」をあらわし、その同じ一つの語をあらわす漢字表記として通用したのであろう。

三つの漢字表記の間に、使用上の違いは無い。

ところで、Ⅲ群でも、「奉」を頻用する一方で、承受の意をあらわす「受」や「承」も使う。一見して「奉」との通用を思わせるが、しかし、使い方にあきらかな違いがある。またⅡ群のように「命」を対象とする例はない。

何故二国之王、不<sub>レ</sub>射来集受<sub>二</sub>天皇勅<sub>一</sub>、輕遣<sub>レ</sub>使乎。(一七二八)

謹承<sub>二</sub>詔勅<sub>一</sub>、悚懼填<sub>レ</sub>胷。(一九五八)

恭承<sub>二</sub>来勅<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>敢停<sub>レ</sub>時。(一九六四)

祇承<sub>二</sub>恩詔<sub>一</sub>、喜慶無<sub>レ</sub>限。(一九七三)

敬受<sub>二</sub>天皇勅<sub>一</sub>、来撫<sub>二</sub>臣蕃<sub>一</sub>。(一九八〇)

稽首受<sub>レ</sub>勅、衆為流<sub>レ</sub>涕。(二七二八)

「奉」を頻用するために、用例は右の六例に尽きるが、それらいずれの「承」や「受」も、敬意をあらわす語を伴う。最初の例にはそれが無いけれども、掲出した限りでも知られるとおり、二国の王がみずから来て勅を受けなかったというそのことに記述上の重点があつたはずで、勅を受けるさいの敬意の有無は関心の埒外にあつたであろうし、また、そもそも二国王の無礼をいうその内容にかんがみても、敬意をあらわす語も、また「奉」も使用するまでもなかったであろう。かりにこれを含めたところで、「奉」と「承」「受」とを使いわけると原則そのものまで否定することはできない。「承」や「受」には敬意をあらわす語を上接させているように、Ⅲ群では、それを敬語とはみていない。一方、「奉」に敬意をあらわす語を上接させた例は、わずかに次の一例しかない。

臣雖<sub>二</sub>拙弱<sub>一</sub>、敬奉<sub>レ</sub>勅矣。(一四三七)

その「憂<sub>レ</sub>陳於天皇曰」という会話文中にある右の例は、「拙弱」の臣が「憂陳」というのであるから、敬意をことさら強調しようとした意図によることは疑いない。こうした例外を除けば、「奉」は、敬意をあらわす語を伴うまでもない、すなわち敬語にはかならない。「勅」や「詔」には、まさにその敬語「奉」がふさわしいとみて、それを多用したはずである。「承」や「受」との使いわけは明らかで、そうした使いわけが、「奉」や「受」「承」を漢語そのままに使用した<sup>⑩</sup>、その成りゆきの結果であることも、これまた説くまでもない。日本語をあらわす漢字表記としてそれらを使用していると考えられるⅡ群とは、かくて、使い方の基調そのものを大きく異にするのである<sup>⑪</sup>。

さて右に言及した「勅」「詔」「命」以外の、表に「その他」として一括した用例を見るに、それらも、Ⅲ群に集中する傾向が著しい。また、いちように漢語的性格が色濃い。たとえば、後漢書の孝順紀（卷六）の「奉<sub>二</sub>遵鴻緒<sub>一</sub>」を出典にもつ「奉<sub>二</sub>鴻緒<sub>一</sub>」（一五四〇）をはじめとして、「奉<sub>二</sub>恩沢<sub>一</sub>」（二四二〇）や「奉<sub>二</sub>其<sub>レ</sub>法<sub>一</sub>」（一五二四以下五例）、「奉<sub>二</sub>使<sub>一</sub>」（二四一九・二六二七）「奉<sub>レ</sub>教」（一九八）「奉<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>誨」（二五二二）なども、次のように文選にその類例がある。

孤奉<sub>二</sub>明恩<sub>一</sub>。（卷一三・謝希逸・月賦）

吏奉<sub>二</sub>其法<sub>一</sub>。（卷四九・干令升・晋紀総論）

奉<sub>レ</sub>使則張騫蘇武。（卷四九・班孟堅・公孫弘伝賛）

奉<sub>二</sub>遵科教<sub>一</sub>。（卷四〇・呉季重・在<sub>二</sub>元城<sub>一</sub>与<sub>二</sub>魏太子<sub>一</sub>牋）

奉<sub>レ</sub>所<sub>二</sub>惠貺<sub>一</sub>。（卷四二・呉季重・答<sub>二</sub>東阿王<sub>一</sub>書）

このほか、Ⅲ群には、もう一つの用例がある。「奉<sub>二</sub>白髮天皇先欲<sub>レ</sub>伝<sub>レ</sub>兄<sub>一</sub>立<sub>二</sub>皇太子<sub>一</sub>」（一五四〇）という「奉」がそれである。一文全体を対象とするという点で、やや特異ではあるけれども、語法上は、この「奉」も従前の例とな

んら変りない。結局、漢語そのものとして「奉」を使うことが「その他」にあたる用例にも一貫していたわけで、それらを含め、さきに取りあげた「勅」や「詔」などを対象とする「奉」の、その多用にⅢ群の特徴がある。そうした特徴を敷衍すれば、すなわち、Ⅲ群では漢語そのものによる表現を基調としていたということが出来る。

一方、同じ「その他」にあてはまる「奉」のⅡ群における用例は、つごう五例あるが、そのうちの三例までが同じ漢書の一節を借用した文中にある。

〔奉<sub>三</sub>宗廟社稷、重事也。(一一 290)〕

〔奉<sub>三</sub>宗廟社稷、重事也。〕大王奉<sub>三</sub>皇祖宗廟、最宜称。(一三 337)〕

奉<sub>三</sub>高帝宗廟、重事也。〕大王奉<sub>三</sub>高祖宗廟、最宜称。(卷四・文帝紀・即位前)

この「奉」については、従来、「うくる(うけたまふ)」と「つかふ」との両訓がある<sup>⑧</sup>。それがもし「つかふ」であるならば、小稿で分類した項目の(三)に該当する例となる。いずれが適当であるか見きわめるうえで、出典である漢書の用例をみるに、「奉<sub>三</sub>宗廟<sub>二</sub>」の例は帝紀に少なくない。その類例には「保<sub>三</sub>宗廟<sub>二</sub>」があり、たとえば、

〔今朕獲<sub>レ</sub>奉<sub>三</sub>宗廟<sub>二</sub>、(卷六・武帝紀、文選・卷三五に「賢良詔」として同文を載せる)〕

〔今朕獲<sub>レ</sub>保<sub>三</sub>宗廟<sub>二</sub>、(卷九・元帝紀)〕

右のように全く同じ表現の例(ほかに昭帝紀、哀帝紀など)もあるが、「保」にはほとんど「獲」(ないし「得」、文帝紀)が上接している。したがって、くだんの例は「保」とは明らかに異なる。またあるいは、

〔朕承<sub>三</sub>太祖鴻業<sub>二</sub>、奉<sub>三</sub>宗廟<sub>二</sub>、二十五年。(卷一〇・成帝紀)〕

〔朕獲<sub>下</sub>執<sub>三</sub>犧牲珪幣<sub>二</sub>以事<sub>上</sub>帝宗廟、十四年于今。(卷四・文帝紀)〕



右の表現の類似から推して、「奉」を「事」とみなしうる（岩波古典文学大系本では、上掲卷一一の例を「つかへまつる」と訓む）ようでもあるが、しかし、その「事」には「獲」が上接しているとおり、「保」とあい似た用例で、これまたくだんの「奉」とは違う。結局、そのあらわす意味の上でも最も近い、ないしは重なるのが「承」である。

〔朕承宗廟、戰戰栗栗、（卷八・宣帝紀）

〔朕承宗廟之重、戰戰兢兢、懼失天心。（卷一一・哀帝紀）

ことに右の後出例は、「奉」宗廟社稷、重事也」と發想そのものが共通する。くだんの「奉」をこの(一)の項目に分類した所以であるが、とはいえ、それは、あくまでもⅡ群が借用した漢書の一節のうちにあるに過ぎない。例外的にⅡ群にあった前掲の、漢書の一節を利用したなかにある「奉詔」と同様、「奉」を独自に使用したのではもとよりない。ほかに、わずかに「奉密旨」（二三<sup>123</sup>）と「奉事」（九<sup>258</sup>）との二例しかなく、さきの「奉命」をあわせても、まさに寥々たる数でしかない。

「奉」の単独用字をとおして、Ⅲ群とは、かく著しく対照的なあらわれをみせる。表現の基調が違うことは明らかに、Ⅲ群が漢語をそのまま使い、その表現に積極的であるのに対して、Ⅱ群では、漢語をそのまま使う表現には消極的である。むしろ、上述のとおり、承受をあらわす場合にも、「受」「被」あるいは「承」などを、それらがもつばら対象とする「命」と同じように、日本語——実際には、すでに正訓字となっていたはずの、それら漢字の和訓——にもとづいて使い、「奉」でさえ、それらの類例として使う。漢語ならぬ漢字を、それに付随した日本語（和訓）をもとに使う、つまりは、それがⅡ群の基調である。正訓字があれば、おおむねそれによって表現を成り立たせていたであろうから、もとより、漢語をそのまま使用することに積極的に出るはずがない。

さて最後に熟合用字の例をみるに、ⅡⅢ群あわせても、わずかに六例しかない。数は少ないが、そのいずれにも、それぞれの群の特徴を認めることができる。

まずⅡ群には二例ある。二例とも「奉承」で、その「奉承密策」(三11)は「奉密旨」(同123)に対して、また「奉承大運」(五158)は「承大運」(後漢書・卷二・明帝紀)に対して、それぞれ「承」あるいは「奉」を加せたという違いでしかなく、構成上は、いずれも「奉」と「承」との類義字の組合せから成る。「奉」と「承」とを同じ「うく」をあらわす漢字表記として使う、そうしたⅡ群に特徴的な使い方と、「奉承」の使用とは、まさに軌を一にする。

一方、Ⅲ群の用例は四例、そのうち三例が「奉遵(順)」である。いずれも後漢書に出典をもつ。

奉順天皇聖旨」(二五216) 奉順聖旨」(卷四・殤帝紀)

奉遵制度」(同250) 遵奉建武制度」(卷二・明帝紀)

奉遵法度」(三〇401) 奉遵法度」(卷一下・光武帝紀)

借用例であるとはいえ、第二例で、原文「遵奉」を「奉遵」に改めているように、独自にとらえ直したうえで使用しており、したがって、それら一連の「奉」は「奉勅」「奉詔」あるいは「奉法」などの「奉」と同じ敬意を含みあらわすものとみなしうる。残る一例は「今發遣国司并彼国造、可<sub>レ</sub>以奉聞。」(二五239)という「奉聞」である。これの対象は「聞<sub>レ</sub>若<sub>レ</sub>是所<sub>レ</sub>宣」(同238)や「当<sub>レ</sub>聞<sub>レ</sub>解此所<sub>レ</sub>宣」(同239)などにいうところの「宣勅」である。「聞」の限りでは、「聖明王、聞<sub>レ</sub>宣勅<sub>レ</sub>已」(一九60)に一致し、それに「汝道那等、奉<sub>レ</sub>斯所<sub>レ</sub>勅、奉<sub>レ</sub>宣<sub>レ</sub>汝王。」(三〇401)などの「奉」を組みあわせたのが「奉聞」であるから、これまた、Ⅲ群に特徴的な用例にはかならない。

かくて熟合用字にも、単独用字をとおしてあらわれたと同じⅡⅢ群それぞれの特徴をみることができる。両用字に共通する各群の特徴を要約すれば、すなわち、Ⅱ群は、日本語にもとづく漢字表記を特徴とし、一方のⅢ群では、漢語そのものを使った表現を特徴とすることである。Ⅱ群についてなお付言すれば、その特徴は、古事記にもあい通じる。次項以下にも、各群それぞれの特徴は、ひき続いてあらわれる。

### (二) 奉 仕

この項目に該当する用例は、奉仕の意味をあらわし、ほぼ日本語の「つかふ」ないし「つかへまつる」にあたる「奉」である。単独用字と熟合用字とがあるが、両用字とも、Ⅲ群に用例が集中する著しい傾向をみせる。

そうした関係上、以下にはⅢ群についておもに言及することになるが、さて、そのあらわれで注目されるのが、熟合用字の用例である。いま、便宜にしたがって、Ⅲ群から「奉仕」およびこれに類する用例を取りだしてみるに、

(一) 僕不<sub>レ</sub>堪<sub>下</sub>共<sub>二</sub>紀卿<sub>一</sub>奉<sub>中</sub>事<sub>上</sub>天朝<sub>上</sub>。(一四<sub>378</sub>)

(二) 謹遣<sub>二</sub>斯我<sub>一</sub>、奉<sub>二</sub>事<sub>上</sub>於朝<sub>上</sub>。(一六<sub>7</sub>)

(三) 千年万歳、奉<sub>二</sub>事<sub>上</sub>天皇<sub>上</sub>。(一九<sub>86</sub>)

(四) 自<sub>レ</sub>今以後、子子孫孫、用<sub>二</sub>清明心<sub>一</sub>、事<sub>二</sub>奉天闕<sub>上</sub>。(二〇<sub>108</sub>)

(五) 今令<sub>二</sub>議者<sub>一</sub>、仕<sub>二</sub>奉朝列<sub>上</sub>。(二〇<sub>110</sub>)

(六) 不<sub>レ</sub>荒<sub>二</sub>朝廷<sub>上</sub>、淨如<sub>二</sub>鏡面<sub>上</sub>、臣治平奉仕<sub>上</sub>。く專言<sub>二</sub>奉仕<sub>上</sub>。(二一<sub>121</sub>)

(七) 始<sub>二</sub>於祖子<sub>上</sub>、奉仕<sub>上</sub>、卿大夫、臣連、伴造、氏氏人等、咸可<sub>二</sub>聽聞<sub>上</sub>。(二五<sub>238</sub>)

(八) 我國自<sub>二</sub>日本遠皇祖代<sub>上</sub>、並<sub>レ</sub>舩不<sub>レ</sub>干<sub>二</sub>職<sub>上</sub>、奉仕之國。く自<sub>二</sub>日本遠皇祖代<sub>上</sub>、以<sub>二</sub>清白心<sub>上</sub>仕奉<sub>上</sub>。(三〇<sub>400</sub>)

つごう十例あるその字面は、「奉事」「奉仕」「仕奉」などと区別である。そのうち「奉事」はまぎれもない漢語であるが、それ以外では、たとえば用例の多い「奉仕」にしても、佩文韻府に用例なく（大漢和には、語釈があつても用例をあげていない）、文選などにもその例がない。常用の漢語であることを疑わせる「奉仕」の、新羅の朝貢にかかわるその(ハ)「並<sub>レ</sub>舳<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>干<sub>レ</sub>楫、奉仕之國」という表現は、そもその歴史的な來源として伝える神功皇后の新羅征服伝承のうち、古事記が伝える一節「毎<sub>レ</sub>年双<sub>レ</sub>船、不<sub>レ</sub>乾<sub>三</sub>船腹<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>乾<sub>三</sub>桅楫<sub>一</sub>、共<sub>三</sub>与<sub>二</sub>天地<sub>一</sub>、無<sub>レ</sub>退<sub>二</sub>仕奉<sub>一</sub>」（中52才）と共通するほか、万葉集の「船並而仕奉之」（933）にも通う。くわえて、奉仕にともなう(四)「用<sub>三</sub>清明心<sub>二</sub>」(ハ)「淨如<sub>三</sub>鏡面<sub>二</sub>」(ハ)「以<sub>三</sub>清白心<sub>二</sub>」などの心意は、古事記にいう「汝心之清明」（上16才）また「我心清明」（上18ウ）に通じる、つまり「異心」（上16才）に対立するものであらうし、奉仕とその心意との密接な関係は、たとえば「明<sub>二</sub>支<sub>一</sub>淨<sub>二</sub>支<sub>一</sub>直<sub>二</sub>誠之心<sub>一</sub>以而御称称而緩怠事無久務結而仕奉<sub>止</sub>」（第一詔）をはじめとして、宣命においては、類型的な表現としてみることが出来る。そして宣命との類縁では、「仕奉」というその表記も、(四)の「用<sub>三</sub>清明心<sub>二</sub>、事<sub>三</sub>奉天闕<sub>二</sub>」や(ハ)の「以<sub>三</sub>清白心<sub>二</sub>、仕奉<sub>一</sub>」などと一致する。表記までも含む宣命との類縁に徴する限り、それら「奉事」や「仕奉」が、宣命と同じように、日本語「つかへまつる」の漢字表記であつた可能性は否めない。

しかしながら、奉仕にともなう「清明心」「清白心」などは、宣命に類型的な「明淨（清）心」ないし「淨明心」と共通するとはいえ、もとより、それらに倣うとか、借りたりしたものではない。そうした心意をあらわす表現は、書紀のなかでも、とりわけⅢ群に集中してあらわれる。Ⅲ群に特徴的な表現といつても過言ではない。類例もあわせて示すと、次のとおりである。

・此娘子、以<sub>三</sub>清身意<sub>二</sub>、奉<sub>レ</sub>与<sub>三</sub>一宵<sub>二</sub>。（一四361）

。其坊令取<sub>下</sub>坊内明廉強直堪<sub>レ</sub>時務<sub>二</sub>者<sub>一</sub>死。里坊長並取<sub>二</sub>里坊百姓清正強幹<sub>一</sub>者<sub>一</sub>死。其郡司並取<sub>下</sub>国造性識清廉堪<sub>レ</sub>時務<sub>二</sub>者<sub>一</sub>、為<sub>二</sub>大領少領<sub>一</sub>。(二五二<sub>225</sub>)

。既而有<sub>下</sub>民明直心、懷<sub>二</sub>国土之風<sub>一</sub>。(二五二<sub>228</sub>)

。宜<sub>下</sub>差<sub>二</sub>清廉使者<sub>一</sub>、告<sub>中</sub>於畿内<sub>一</sub>。(二五二<sub>237</sub>)

。是故始<sub>二</sub>於公卿<sub>一</sub>及<sub>二</sub>百官等<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>清白意<sub>一</sub>、敬奉<sub>二</sub>神祇<sub>一</sub>。(二五二<sub>250</sub>)

。將<sub>二</sub>清白心<sub>一</sub>、仕<sub>二</sub>官朝<sub>一</sub>矣。(二六<sub>265</sub>)

。而傷<sub>二</sub>清白<sub>一</sub>、詐求<sub>二</sub>幸媚<sub>一</sub>。(三〇<sub>400</sub>)

。以<sub>二</sub>清白忠誠<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>敢怠惰<sub>一</sub>。(三〇<sub>409</sub>)

前掲(四)の「用<sub>二</sub>清明心<sub>一</sub>、事<sub>二</sub>奉天關<sub>一</sub>」(六)の「淨如<sub>二</sub>鏡面<sub>一</sub>、臣治平奉仕」、また(八)の「以<sub>二</sub>清白心<sub>一</sub>仕奉」などは、こうしたなかの一例にすぎない。

ところで、用例の多い「清白(心)」についていえば、それは、あきらかに漢語である。たとえば後漢書には、次のような例がある。

詔<sub>レ</sub>光祿勳与<sub>二</sub>中郎將<sub>一</sub>、選<sub>二</sub>孝廉郎寬博有<sub>レ</sub>謀、清白行高者五十人<sub>一</sub>、出補<sub>二</sub>令、長、丞、尉<sub>一</sub>。(卷五・孝安帝紀)

詔<sub>二</sub>三公、中二千石<sub>一</sub>、举<sub>二</sub>刺史、二千石、令、長、相、視事一歲以上至<sub>二</sub>三十歲<sub>一</sub>、清白愛利、能勅<sub>レ</sub>身率<sub>レ</sub>下、防<sub>レ</sub>姦理<sub>レ</sub>煩、有<sub>レ</sub>益<sub>二</sub>於人者<sub>一</sub>、無<sub>レ</sub>拘<sub>二</sub>官簿<sub>一</sub>。(同右)

「清白」とは、すなわち臣下を選抜するうえでの資格であった。またあるいは、後漢書(卷四・孝和帝紀の永元五年三月の詔)の注が引く漢官儀では、そのことを、明確に規定した詔書を伝える。

建初（後漢の肅宗帝の年号）八年十二月己未、詔書辟士四科、一曰德行高妙、志節清白、二曰（以下略）

右の詔書では、「清白」を、士を四科に分けて選抜するうえでの第一の主要な資質として規定している。

奉仕に関連して、「清白心」などの心意を強調するのは、宣命を除けば、このⅢ群を措いてほかにない。「つかへまつる」の用例が多い古事記や万葉集にしても、皆無である。宣命にいう「明浄心」「浄明心」とのかかわりについては、なお別に考えなければならないが、少くとも、「清白」を士のあるべき理想的な心意とする漢語表現を、Ⅲ群の「清白」ないし「清白心」が借りていることは疑いない。「清明心」などの関連するいくつかの表現も、同じ漢語表現とみなしうるはずである。「奉仕」以下の一連の用例についても、「奉」や「仕」のそれぞれに、「以清白意敬奉神祇」（二五<sup>250</sup>）あるいは「将清白心、仕官朝一矣」（二六<sup>265</sup>）などのように、同じ心意をとまう例があることにかんがみて、その二つを組みあわせた漢語とみて恐らく誤りないであろう。

ところでⅢ群には、右の「奉事」以下の用例のほかに、熟合用字が三例ある。「供奉」がそれで、いずれも卷三〇にある。

饗下神祇官長上以下至神部等、及供奉播磨国因幡国郡司以下至百姓男女。（三〇<sup>412</sup>）

復免供奉騎士、諸司荷丁、造行宮丁、今年調役。（三〇<sup>413</sup>）

免下近江美濃尾張参河遠江等国供奉騎士戸、及諸国荷丁、造行宮丁、今年調役。（三〇<sup>414</sup>）

「供奉」はもとより漢語であり、右の三例とも、その応用とみられるが、続日本紀には、最初の例が対象とする大嘗を、同じように対象とする記述に「賜神祇官人、及供事尾張美濃二国郡司百姓等物、各有差。」（文武天皇二年十一月己卯）とある。他の二例は、行幸にともなう「供奉」である。

大嘗と行幸と、いずれにしても、具体的な対象についての奉仕行為を「供奉」はあらわす。Ⅲ群では、「供奉」の使用を、そうしてあきらかに限定している。「奉事」以下の用例が、むしろ抽象的な臣従の意をあらわすといった性格が強いのは、著しく対照的であり、Ⅲ群がその両者を使いわけていることは疑いを容れない。

さて、翻ってⅡ群の用例をみるに、三例しかないが、どれも「侍奉」とある。しかもⅢ群の用例になぞらえていえば、その「供奉」に相当する、すなわち具体的な対象についての奉仕行為をあらわす。

(一)天皇、於是看御友別謹惶侍奉之状一而、(一〇280)

(二)侍奉大嘗、中臣忌部及神官人等、并播磨丹波二国郡司、亦以下人夫等、悉賜祿。(二九334)

(三)侍奉新嘗、神官及国司等、賜祿。(二九346)

右のうち(一)(三)、はそれぞれ大嘗、新嘗への奉仕であるから、同じ大嘗に対する奉仕をあらわしたⅢ群の「供奉」とは、たがいに類縁をもつ。天皇への奉仕をあらわす(一)は、それらとは異なるけれども、しかしながら、右に引用した記述の直前に「時御友別参赴之、則以<sub>二</sub>其兄弟子孫<sub>一</sub>、為<sub>二</sub>膳夫而奉<sub>レ</sub>饗焉<sub>一</sub>」とあって、それが飲食を供するという具体的な行為にかかわる奉仕であることは明らかである。この(一)もまた、Ⅲ群での「供奉」に通う。

ところで、Ⅱ群の「侍奉」は、Ⅲ群の「供奉」に通うとはいえ、その一方で、古事記の「仕奉」に著しい親近をもつ。(一)の「侍奉」について言えば、それに先立つ記述の「奉<sub>レ</sub>饗」は、同じⅡ群のうちにもう一例「造<sub>二</sub>一柱<sub>一</sub>膳宮<sub>二</sub>而奉<sub>レ</sub>饗焉<sub>一</sub>」(三113)とあり、それが古事記の「作<sub>二</sub>足一膳宮<sub>一</sub>而献<sub>二</sub>大御饗<sub>一</sub>」(中1ウ)と吻合することから、饗<sub>あへ</sub>を献る意をあらわしていることは疑いないが、さて、その「奉<sub>レ</sub>饗」や「為<sub>二</sub>膳夫<sub>一</sub>」などと、「侍奉」との関連を、古事記にもみることができる。

時、御友別参赴之、則以<sub>二</sub>其兄弟子孫<sub>一</sub>、為<sub>二</sub>膳夫而奉<sub>レ</sub>饗焉。——侍奉

〔故爾、邇芸速日命参赴、〵即献<sub>二</sub>天津瑞<sub>一</sub>以仕奉也。〕（中8ウ）

〔久米直祖、名七拳脛、恒為<sub>二</sub>膳夫<sub>一</sub>以從仕奉也。〕（中47ウ）

右のような文脈にかかわる類縁に徴して、Ⅱ群が「侍奉」を古事記の「仕奉」と同じように使用していることは明らかである。古事記では、「仕奉」を日本語「つかへまつる」の漢字表記として使う。たとえば「伊賀所<sub>二</sub>作仕奉<sub>一</sub>、於<sub>二</sub>大殿内<sub>一</sub>者」（中5ウ）「肥河之中、作<sub>二</sub>黒巢橋<sub>一</sub>、仕<sub>二</sub>奉飯宮<sub>一</sub>而坐。」（中33オ）など、建物を作り営む意をあらわす「仕奉」まであるが、それは、「天地と相ひさかえむと大宮を都可倍麻都礼婆貴くうれしき」（万<sub>4273</sub>）などという、まさに日本語「つかへまつる」にほかならない。そうして一般に、古事記の「仕奉」は、たとえば「為<sub>二</sub>神之御尾前<sub>一</sub>而仕奉」（上46オ）、あるいは「為<sub>二</sub>汝命之昼夜守護人<sub>一</sub>仕奉。」（上56ウ）などのように、天皇の側近に仕えるといった意味あいが色濃い。Ⅱ群の（一）の「侍奉」は、そうした日本語「つかへまつる」に色濃い意味を汲んだ表記だったのではないか。（二）の「侍<sub>二</sub>奉大（新）嘗<sub>一</sub>」にしても、飲食の供御にかかわる奉仕という点では、（一）の「侍奉」と変りない。ときに「清白（心）」などをともなう「奉事」以下の漢語では、むしろ抽象的な臣従の意味あいも色濃い。それ以外では「供奉」を使い、そうして漢語により使い分けているⅢ群とは、ひっきょう、使用する言語そのものに違いがあつたのである。

かくてⅢ群では、あきらかに漢語表現を基調とする。その基調は、単独用字として「奉」を多用する、多用そのことばかりでなく、その個々の用例をおしても認めうる。すなわち、ほとんどの用例が漢籍中の表現に類縁をもつ。

。奉<sub>二</sub>至尊<sub>一</sub>者、然後知<sub>二</sub>百里卑微<sub>一</sub>也。（文選・卷四二・答<sub>二</sub>東阿王<sub>一</sub>書）



宜<sub>レ</sub>從<sub>ニ</sub>遺詔<sub>一</sub>、奉<sub>中</sub>皇太子<sub>上</sub>。(一五396)

奉<sub>レ</sub>兄、謀<sub>レ</sub>逃<sub>ニ</sub>脱難<sub>一</sub>。(一五405)

誰人主以奉<sub>ニ</sub>天之靈<sub>一</sub>。(一五410)

若欲<sub>下</sub>国家無事、長作<sub>ニ</sub>宮家<sub>一</sub>、永奉<sub>中</sub>天皇<sub>上</sub>。(一九75)

歷<sub>ニ</sub>三代<sub>一</sub>以奉<sub>ニ</sub>日神<sub>一</sub>。(二二120)

以<sub>ニ</sub>清白意<sub>一</sub>、敬奉<sub>ニ</sub>神祇<sub>一</sub>。(二五250)

。僻<sub>ニ</sub>処西館<sub>一</sub>、未<sub>レ</sub>奉<sub>ニ</sub>闕庭<sub>一</sub>。(文選・卷二〇・上責<sub>レ</sub>躬応<sub>レ</sub>詔詩<sub>一</sub>表)

遂使<sub>下</sub>海西諸宮家、不<sub>レ</sub>得<sub>ニ</sub>長奉<sub>ニ</sub>天皇之闕<sub>一</sub>。(一九62)

。封<sub>ニ</sub>河間王利子康<sub>一</sub>、為<sub>ニ</sub>濟南王<sub>一</sub>、奉<sub>ニ</sub>孝仁皇祀<sub>一</sub>。(後漢書・卷八・孝靈帝紀)

以<sub>ニ</sub>酢香手姫皇女<sub>一</sub>、拜<sub>ニ</sub>伊勢神宮<sub>一</sub>、奉<sub>ニ</sub>日神祀<sub>一</sub>。(二二120他二例)

奉<sub>ニ</sub>伊勢神祠<sub>一</sub>、皇女大来、還至<sub>ニ</sub>京師<sub>一</sub>。(三〇393)

。巴夷王朴胡、實邑候杜濩、各帥<sub>ニ</sub>種落<sub>一</sub>、共奉<sub>ニ</sub>邑郡<sub>一</sub>以奉<sub>ニ</sub>王職<sub>一</sub>。(文選・卷四四・檄<sub>ニ</sub>呉將校部曲<sub>一</sub>文)

緣<sub>レ</sub>奉<sub>ニ</sub>国政<sub>一</sub>、到<sub>ニ</sub>於京民<sub>一</sub>。(二五228)

一方、Ⅱ群には、「故、吾以<sub>ニ</sub>饒速日命<sub>一</sub>、為<sub>レ</sub>君而奉焉。」(三172)と「新羅不<sub>レ</sub>奉<sub>ニ</sub>貴国<sub>一</sub>。」(九263百濟記の一節)との二例があるにすぎない。「奉」の限り違いはないであろうが、それが対象とする語では、Ⅲ群の例に一致するものはない。疑えば、たとえば「山川もよりて奉流<sub>つみよ</sub>」(万3839)などから、その和訓にもとづく使用を想定しうる余地もある。とはいえ、万葉集には他に用例なく、古事記にいたっては、絶無である。正訓字としての用例は、ほとんど

無いに等しい。漢語そのままそれを使つていたとしても、わずかに二例、しかもそのうちの一例が百濟記の記述にあるということは、かえつて、このⅡ群が漢語の使用に消極的であつたことを強く示唆するであらう。

以上で、単独用字・熟合用字とも該当する用例は尽きる。両用字をとおして、Ⅱ群とⅢ群との違いは、一貫して、また顯著にあらわれる。その違い、さらには両群におのおの独自の特徴は、既述の(一)(二)項目の用例をとおして認めえたそれと、もとより別のものではない。

#### 四 謙 讓

この項目に該当する用例は、謙讓の敬意をあらわす「奉」で、ほぼ日本語の「まつる」ないしは「たてまつる」にあたる。その敬意のあらわし方をかいつまんでいえば、すなわち話し手(地の文では記述する者)が話題の世界において、為手の行為を低めることを通して、その行為の受け手を高めるといふことである。うやうやしなどの通常いわれる意味は、そうしてあらわす敬意を言表したものにはかならない。したがつて、この「奉」の使用は、話し手が為手の行為を受ける受け手をどのように対遇していたかといった、受け手に対する敬意の程度に大きくかわる。次の例は、そのことを端的に物語る。

巨勢徳大臣、詔<sub>ニ</sub>於高麗使<sub>一</sub>曰、明神御宇日本天皇詔旨、天皇所<sub>レ</sub>遣之使<sub>与</sub>高麗神子奉<sub>レ</sub>遣之使<sub>一</sub>、既往短而将来長。是故、可<sub>下</sub>以温和之心<sub>一</sub>、相繼往来<sub>上</sub>而已。(二五二<sup>18</sup>)

巨勢臣の詔は、日本と高麗との友好関係を将来にわたつて維持しようという天皇の詔旨をその内容としたものであるが、そのなかの「相繼往来」のために使いを遣わすという記述において、使いを遣わすという同じ行為でありながら、天皇が為手で高麗が受け手となる場合では、「所<sub>レ</sub>遣之使」とあつて敬意をあらわさない。一方、それとは逆に、

高麗国王が為手で日本（つまり天皇）が受け手となる場合では、「奉<sub>レ</sub>遣<sub>二</sub>之使<sub>一</sub>」とする。「奉」を使用して、行為の受け手、日本（天皇）に対して敬意をあらわした著しい例である。

さてⅢ群には次の記述がある。

伏願、可畏天皇<sub>西蕃皆称日本天皇、為可畏天皇。</sub> 先為勘当。（一九七）

右の「可畏天皇」という、「西蕃」が使うその呼称は、彼等が天皇に対して抱いていた強い畏敬の念をあらわしたものである。そうした畏敬の念をもつ以上、天皇を受け手とする行為に、その行為を低めて天皇に敬意をあらわす「奉」を用いることは、むしろ自然であつたに相違ない。その使用は、時として煩瑣におよぶ場合がある。

僕（日羅）竊聞、百済国主、奉<sub>レ</sub>疑<sub>二</sub>天朝<sub>一</sub>、奉<sub>レ</sub>遣<sub>二</sub>臣後、留而弗<sub>レ</sub>還。所以奉<sub>レ</sub>惜、不<sub>レ</sub>肯<sub>二</sub>奉進<sub>一</sub>。（二〇一〇）

一方、右の記述にしても、「奉」の使用それ自体は、話し手による。百済人日羅が伝聞する相手がその話し手であるが、しかしながら、話し手が誰であるかは、「奉」の使用に限っては、それほど重い意味をもたない。というのも、右の記述に先立って同じ内容を伝えた一文「百済国主、奉<sub>レ</sub>惜<sub>二</sub>日羅<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>肯<sub>二</sub>聴上<sub>一</sub>」（同右）の、その話し手が紀国造押勝で、右の日羅が聞いた話し手とは違うように、ただ行為の受け手を天皇（日本もしくは朝廷でも同じ）とするという、そのことだけが「奉」を使用する上での必要にして十分な条件であつたはずである。地の文においても、右の記述のあとに、

於是、百済国主、怖<sub>二</sub>畏天朝<sub>一</sub>、不<sub>二</sub>敢違<sub>レ</sub>勅。奉<sub>レ</sub>遣以<sub>二</sub>日羅（以下略）若干人<sub>一</sub>。（同右）

右のように「奉」を使う。それが、行為の為手百済国主が「怖<sub>二</sub>畏天朝<sub>一</sub>」というように、受け手「天朝」に対して「怖畏」の念をもつと把握した記述者その人の敬意によることは説くまでもない。

結局、西蕃が天皇を「可畏天皇」と呼称するという、その呼称にあらわれた畏怖・尊崇の念を彼等が天皇に対して抱いているといった認識が地の文にせよ、また会話文にせよ貫かれていて、「奉」は、その認識、すなわち関係把握にもとづいて使用されたものとみなしうる。「奉」の使用は、当然のことながら三韓をめぐる外交記事中に著しい——巻一九では、ほとんど全て——けれども、もちろん、たとえば「畏敬兼抱、思<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>君」(一五三)とある一文の主語が「山部連先祖、伊予来目部小楯」であり、「君」、すなわち後の顕宗天皇を彼もまた「畏敬」するということに、為手のいかんを問わず、天皇を受け手とする場合の関係把握は、Ⅲ群をとおして一貫していたはずである。右の一文にひき続いて、

奉<sub>レ</sub>養<sub>レ</sub>甚<sub>レ</sub>謹、以<sub>レ</sub>私<sub>レ</sub>供給。便起<sub>ニ</sub>柴<sub>ニ</sub>宮、権奉<sub>ニ</sub>安置。(同右)

「奉」の使用を続けているもの、ひっきょう、受け手となる天皇を「畏敬」するという、その関係把握による。

かくて畏怖・尊崇の念をもって天皇を対遇する、そうした表現上の志向によって、Ⅲ群での「奉」の多用が結果したとみることができる。多用に結果する「奉」の使用は、また多様でもある。たとえば天皇にかかわる事物を対象とする場合にまで「奉」の使用は及ぶ。

忽爾奉<sub>レ</sub>惜<sub>ニ</sub>王<sub>ニ</sub>地、輕<sub>ニ</sub>背<sub>ニ</sub>使<sub>ニ</sub>乎<sub>ニ</sub>宣旨。(一八四)

蓋<sub>下</sub>各<sub>下</sub>尽<sub>レ</sub>忠、奉<sub>レ</sub>展<sub>ニ</sub>聖<sub>ニ</sub>懷。(一九五)

是以、朕当<sub>下</sub>奉<sub>レ</sub>助<sub>ニ</sub>神<sub>ニ</sub>謀。(欽明天皇の任那復興の意図)、復<sub>下</sub>興<sub>ニ</sub>任那。(二〇八)

皇太子奉<sub>レ</sub>徙<sub>ニ</sub>天皇<sub>ニ</sub>之<sub>ニ</sub>喪。(二六二)

もとより類例は少なくないが、これらの用例にあっては、行為の受け手の存在は、不可欠の要件ではない。むしろこ

とがらの内容——つまり傍線を付した語がひとしくあらわしている天皇にかかわる尊貴性——、「奉」の使用は、かかつてそのいかによる。ことがらが天皇にかかわる内容であれば、その尊貴性ゆえに「奉」を使って敬意をあらわす、これがⅢ群での「奉」の使用を著しく増大させていたはずである。それがまた特徴でもある。

こうした「奉」使用の広がり、ただそれを多用したというだけの結果ではなかったであろう。Ⅲ群ではあきらかに積極的かつ意図的に使用している。たとえば次のように、漢籍中の文辞を利用するさい、原文を改変したところに「奉」を使用した例がそのことを端的に物語る。

大臣・大連等奏言、皇太子億計、聖德明茂、奉讓天下。陛下正統。（一五四〇）

尚書令劉光等奏言、孝安皇帝、聖德明茂、早棄天下。陛下正統。（後漢書・卷六・順帝紀）

ところで右の改変は、原文の「早棄」が述べようとする意にそぐわないための、いわば止むをえない措置であったろうが、そのうちの「讓」はともかく、「奉」はかならずしも文意の展開に不可欠というほどの重い意味をもっていない。他に適当な修飾語を使用する余地もあったはずである。にもかかわらず、というのが言い過ぎであれば、その上で、「奉」を使ったということは、とりもなおさず、これ以前に、同じ受け手、つまり顯宗天皇に「奉」を使う例がいくつもある、その例を襲ったものであろう。

なおまた重ねていえば、そもそも文脈上の基本的な意味の展開に、「奉」は不可欠ではない。さきに適当な修飾語を使用する余地もあったといったが、それは、あくまでも、四字句としての単位的なまとまりがそこに考慮されて然るべきであるという前提にもとづく。この句の前後に四字句のまとまりが構成されていなければ、改変が「讓天下」の三字句であった可能性も否定できない。もとより現になされている以外の表現は、いかなるものにせよ、ついに推測

の域を出ないが、しかし、ともかくも、原文の四字句が連続するその構成を、改変にさいしてもくずしていかない。ということは、そこに、句構成をととのえることへの配慮が強く働いていたとみななければならない。実際、この例に限らず、Ⅲ群の該当する「奉」のほとんど全てが四字句や六字句、またまれに五字句などの句的なまとまりのうちであり、その句的なまとまりが相互に對的ないしは連統的な構成をなり立たせるといった顕著な傾向をみせる。

したがって、「奉」の使用には、敬意をつとめてあらわそうとするその意図ばかりでなく、また別に、句構成をととのえようとするいわば修辭上の意図も与つて大きな力となつていたはずである。それが、漢籍中の文辭を利用するさい原文を對表現へと改変する志向と同じく、結局は、漢文としてのととのいをめざしていることは言を俟たない。

Ⅲ群のそうした特質は、「奉」ばかりでなく、為手の行為にそくして——つまり修飾というかたちで——、その行為の對象ないしは受け手に対して敬意をあらわす一連の語、たとえば「伏」「敬」「謹」「恭」などであるが、それらの多用をうながしてもいたであらう。そのいくつかの例については、承受の項目ですでに閑説したが（五四頁）、ここにまた改めて取りあげるならば、それらと「奉」とは、行為の受け手ないしはその對象に対して敬意をあらわすという点で、たがいに共通する性格をもつ。実際に、両者は、次のように通用されてもいる。

謹遣<sub>ニ</sub>斯我<sub>ハ</sub>、奉<sub>ニ</sub>事於朝<sub>。</sub>（一六七）

遂与辭訣、奉<sub>レ</sub>遣<sub>ニ</sub>於朝<sub>。</sub>（一四三六）

敬順<sub>ニ</sub>天皇詔勅之詞<sub>。</sub>（一九五七）

此六人、奉<sub>レ</sub>順<sub>ニ</sub>天皇<sub>。</sub>（二五二三）

慶之尊之、頂戴伏奏。(二五233)

遣疾使迅如飛鳥、奉奏天皇。(一九65)

「伏」以下の語と互換可能な、その限り副次的とも言える「奉」の性格は、右の「奉奏」の「奏」がもともと天皇をその行為の受け手とする場合に限って使う、いわば敬意を含みあらわす語であり、「奉」はそれに敬意を重ねるに過ぎない、つまりは付加的な語でしかないことにも著しい。またあるいは「奉宣」の場合でも、

天皇幸藤原内大臣家、命大綿上蘇我赤兄、奉宣恩詔。(二七296)

命土師宿禰根麻呂、詔新羅弔使級浪金道那等曰、太政官卿等、奉勅奉宣。(三〇400)

「奉」があらわす敬意の対象を右のように明示すると否とにかかわらず、「宣」それ自体に、すでに詔勅かもしれない具体的な内容（たとえば「諸政」「葬饗」「天神地祇之事」等）などを対象とすることが条件づけられているはずであるから、「奉」の使用はまさに付加的であって、その副次的な性格は否むべくもない。

副次的というその性格の、わけても著しいのが、「奉為」における「奉」である。次のように「謹」と互換的な例もある。

謹為國家、奉置四処屯倉。(一八42)

奉為國家、使於海表。(二〇110)

山田孝雄は、この「奉為」について、推古朝の金石文をはじめとする「用例がすべて仏事に関する文章中に存する」と指摘するが、それが中国から伝えられた慣用的な用法であり、書紀（といってもⅢ群にしか用例はない）でも、おおむねその襲用に近い状態にあるにしても、そのまま固定的に使っているとは限らない。右掲の例が百済に関する外

交記事の一節であることはもとより、「謹」と互換的なその使い方に照らしても、それがⅢ群に特徴的な「奉」の使用と軌を一にすることは疑いない。この「奉為」が「みために」と訓まれるとおり、もはや「奉」に、「まつる」ないし「たてまつる」などの、それを正訓字として使用する場合に対応する日本語はあてはまらない。「奉」は、「為」に対して副次的に、「つつしみて」などがそれにあたる敬意をあらわす語として付加したに過ぎないであろう。そしてその際、次に続く「使」以下の、同じような四字句構成のまとまりとの対的な対応も、もちろん、考慮されていたに相違ない。

その「奉為」がⅢ群を特徴づけるかのように群内に散在するのと同様に、上述の「奉宣」や「奉遣」なども、群内の複数の巻にあらわれる。それらをあわせるだけでも、ほぼⅢ群の輪郭を捉えることができる。

奉遣——巻一四(2)一七(1)一九(1)二〇(2)二四(1)二五(1)

奉為——巻一九(1)二〇(1)二一(3)二五(2)二七(1)三〇(1)

奉宣——巻一七(1)二五(1)二七(3)三〇(6)

一方、Ⅱ群では、「奉」の使用には極めて消極的である。Ⅱ群をとおして、わずかに八例、しかも「奉」が付接する語の異なり語の数も、「迎」「示」「典」「定」「見」「送」の六例に過ぎない。そうして数が少ないからかもしれないが、右の例のうちに、受け手が不在という例はない。唯一疑わしい「奉定」にしても、

神欲<sub>レ</sub>居之地、必宜<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>定。(九<sub>250</sub>)

「地」は「定」の対象であって、それとは別に、その行為を受ける受け手、すなわち「神」に対して敬意をあらわしたものとみなしうる。Ⅱ群での「奉」の使用は、かく限定的でもあるが、それらのうちには、古事記の用例に共通す



る例がある。たとえば右掲の「奉定」が「定奉天神地祇之社。」（中22ウ）に通うほか、

吾者、立皇御孫命之前後、以送奉于不破而還焉。（二八324）

右の「送奉」は、

此立御前、所仕奉猿田毘古大神者、專所顯申之汝、送奉。（上49ウ）

日本語の語順のまま「奉」を動詞に下接させた——それが古事記の通例であるが——右の「送奉」と全く一致する。そのほか次のような類似した例もある。

取饒速日命之天羽羽矢一隻及步軻以奉示天皇。（三128）

指出其鏡、示奉天照大御神之時、（上21オ）

古事記では、たとえば「伊都岐奉于倭之青垣東山上」（上37ウ・ほかに同48ウ）「何為日足奉」（中27ウ・ほかに同31オに二例）などの仮名との交用例が示すとおり、「奉」を「まつる」の漢字表記として使う。右に掲出したⅡ群の例が、古事記のそうした漢字表記の用例と一致ないし類似するということは、それらが同じ「まつる」の漢字表記であった可能性を強く示唆するであろう。

さらに言えば、Ⅱ群には、Ⅲ群に散見し、その数も少なくない「奉為」以下の用例がない。また「伏」以下の用例も、あるにしても、おおむね実質的な意味をあらわすものに限られている。Ⅲ群の用例に共通する、つまりは行為の受け手ないしはその対象に対して敬意をあらわすだけの例は、漢書文帝紀の一節をそのまま借用した「臣伏計之」（一三337）と「群臣伏固請」（二二3179）と、ほかに「大唐之國」からの親書中の「朕欽承宝命」（二二150・注11参照）と唐帝へさし出した国書——その性格上、漢文的潤色が著しい——中の「東天皇敬白西皇帝」と「謹白不具」

(以上二二五) などがあるにすぎない。古事記もまた同様であって、類例は皆無に等しい。ただ序文にだけは、「謹隨詔旨」「謹以献上」とあるほか、さらに「伏惟、皇帝陛下」という用例があるが、その後者は進五經正義表の辞句をそのまま襲った借用例である。なおまた宣命では、第四十一詔中の、

昼毛 夜毛 倦怠<sup>忌</sup> 无久<sup>謹美</sup> 礼<sup>比末</sup> 仕奉<sup>都</sup> 侍利。(称徳天皇・天平神護二年十月)

右の例が初出であって、しかもそのうちの「昼毛 夜毛」は、昼夜を並列させる場合の日本語での類型的な表現、たとえば万葉集の「夜昼と云はず」(193)「夜昼と云ふ別知らに」(716)「夜昼別かず」(2902)などとは逆構成の漢語「昼夜」の応用であるから、「謹美 礼比末」も漢語を応用した疑いが色濃い。もとより万葉集の歌に、「つつしみて」などの例はない。

こうして、「伏」以下の語の使用を原則として行なわないⅡ群は、あきらかに万葉集や古事記などと同じ基調にあるといっても過言ではない。さきに可能性としていうにとどめた「奉」の使用についても、もはや、それを「まづる」の漢字表記として使用しているとみて誤りないはずである。「奉」はもとより、「伏」以下の使用にも積極的なⅢ群が、そうして漢語また漢文表現を基調とするのとは、表現の基調そのものを大きく異にしていたのである。

#### (四) 右以外

さて最後に残ったこの(四)の項目であるが、表中に便宜「右以外」と標題を掲げたとおり、既述の(一)～(三)の項目にはずれる全ての用例が対象である。もとより用例は一通りではなく、漢籍中に類例をもつか、もしくは出典をもつかなど、いずれも漢語であることのあきらかな例ばかりである。それに関連して、この項目にあてはまる用例は、ほとんどがⅢ群に集中する。これまた著しい特徴である。

例外的なⅡ群の用例は、わずかに二例しかない。いずれも出典をもつが、まずは次の例。

魏志云、正始元年、遣建忠（魏書の原文「中」に作る）校尉梯携（同「備」に作る）等、奉詔書印綬、詣倭国也（同「也」無し）。（九257）

魏志の引用文であるから、傍線部も、もちろん漢語であるが、「奉」については、たとえば岩波古典文学大系本では、それを「たてまつりて」と訓む。しかしながら、「奉」の受け手「倭国」を、魏書（三〇・東夷「倭」）では、魏への朝献国として扱い、敬語は一切使わない。そうした点でも、「奉」は、むしろ魏が下賜する「詔書印綬」に対して敬意をあらわしているはずで（七七頁（参照））、もとより「たつまつる」の訓はふさわしくない。また（二）（四）のどの項目にも、それはあてはまらない。もう一つⅡ群にある例は、次のように、仏典を借用した文中にある。<sup>9)</sup>

諸惡莫作、諸善奉行。（二178）

「奉」は（一）（三）に該当せず、また敬意をあらわしたものでもないのに、（四）にもあてはまらない。かくしてⅡ群のこの（四）の項目にあたる例は、二例とも漢籍・仏典の一節を借用したなかにある。漢語であるとはいえ、Ⅱ群が独自に使用した「奉」ではない。したがってⅡ群では、「奉」を上述の（一）（四）の項目のいずれかに、そしてその限りで使用していたとみることができる。上述のとおり、Ⅱ群が「奉」を原則として日本語にもとづく漢字表記として使用していたことによって、そうした限定的な使用にとどまったのであろう。

Ⅱ群とは対照的に、Ⅲ群では、この項目に該当する「奉」を、独自に、また少なからず使用している。そのなかで、まず注目されるのは、「奉」がその対象とする人名を下接させる次の例である。

（一）小楯等奉德計・弘計、到摂津国、（一五399）

(二)竊奉<sub>三</sub>天皇与<sub>三</sub>億計王、避<sub>三</sub>難於丹波国余社郡。(一五401)

(三)蘇我馬子宿禰等奉<sub>三</sub>炊屋姫尊、詔<sub>三</sub>(三名)曰、(二二125)

四皇太子、乃奉<sub>三</sub>皇祖母尊・間人皇后、并率<sub>三</sub>皇弟等、往居<sub>三</sub>于倭飛鳥河辺行宮。(二五254)

(四)乃奉<sub>三</sub>(右例に同じ)・并率<sub>三</sub>皇弟公卿等、赴<sub>三</sub>難波宮。(二五256)

(六)皇太子奉<sub>三</sub>皇祖母尊、遷居<sub>三</sub>倭河辺行宮。(二五256)

(七)五臣奉<sub>三</sub>大友皇子、盟<sub>三</sub>天皇前。(二七302)

類例はあるが、「奉」が人ならぬ事物を対象とする点に違いがあり、それらはこの後に取りあげるとして、右掲の例では、いちように人を「奉」の受け手とし、しかもその受け手と為手とが上下尊卑の關係にある。「奉」が受け手に對する敬意を含む敬語であることは疑いない。その敬意を含む「奉」自体の意味は、しかしながら容易にはとらえがたい。たとえば(四)(五)の文中で「并」をさし挟んで「奉」と「率」とが並列する、その限りでは、古訓のように「あてまつり」と訓みうるにしても、その訓は、(三)にはあてはまらない(三)の「奉」を古訓では「あがめ」と訓む。「奉」が日本語のうちには正しく対応する語をもたない漢語であるためのそ、とみられるが、漢語としては、もちろん、特異な用法ではない。意味的にも、

奉<sub>三</sub>先帝而追孝、立<sub>三</sub>唐祀乎堯山。(文選・卷四・南都賦)

右の「奉」などと共通する、あえていえば「上におしただく」というほどの意味か、もしくはそれに近い意味をあらわすとみて、恐らく大きく誤らないはずである。

また一方、右の類例で、表現としてはあい似たものの、「奉」が受け手ならぬ事物をその対象とする次の例でも、

あらわす意味にそれほど違いがあるわけではない。

(一) 奈率弥麻沙・奈率已連等至臣蕃、奉詔書曰、(一九六)

津守連等至臣蕃、奉勅書、問建任那。(同右)

福信迎來、稽首奉國朝政、皆悉委焉。(二七二)

(二) 請奉洪業、付屬大后。(同三〇)

右に分類した(一)(二)のうちのそれぞれ二つの文相互に、「奉」とそれに続く動詞との相関がほとんど同じである上に、その四例の「奉」を、古訓ではみな「あげ(て)」と訓む。實際、最後の一文は「願陛下率天下、附皇后。」(二八三)と全く同じ内容を伝えた記述であるから、その「奉」と「率」との関連は否むべくもない。けれども前掲の(四)(五)で、並列していたにもかかわらず、その一方の「率」とは違って「奉」が敬意を含みあらわしていたのと同じように、「率」には認めがたい敬意を、右の(一)(二)の四例全ての「奉」が含みあらわしていることは明らかであろう。「詔書」や「勅書」が敬意の対象であることは勿論(七五頁・魏志の例参照)、(一)の「洪業」でさえ、たとえば「子末小子、奉承聖業、夙夜震畏、不敢荒寧」(後漢書・卷二・顯宗紀)や、また「奉承大業」(同・卷三・肅宗紀)「奉承鴻業」(同・卷五・孝安紀)などの類例に徴して、もとより敬意をあらわして然るべき対象であったに相違ない。さらにまた、右以外に、仏法に対して「奉」を用いた例がある。その「奉」の使用は、次のように仏法が尊敬の対象であったからで、上述の「奉」の類例とみなしうる。

且夫、遠自天竺、爰洎三韓、依教奉持、無不尊敬。(一九七)

故、當勤心奉仏法也。(三〇四)

古訓では、前者を「うけ（たもち）」、後者を「あがめたてまつる」と訓むけれども、後者の訓みはともかく、前者の「奉持」を含む一文では、「天竺」に対して「三韓」が対応するのと同様に、「尊敬」に「奉持」が対応しているはずであって、類義語同志のその対応に照らして、くだんの「奉」には、むしろ「上におしただく」といった意味があたる。後者の古訓は、そうした意味にもとづいて日本語をあてた、いわば翻訳の結果にほかならない。

こうしてこの(四)の項目に属する用例は、漢語に独自の「奉」を、そのまま使用した点に特徴がある。使用そのものが限られてもいるが、対応する日本語（古訓）も、用例ごとに区々にあり、それぞれ、文脈にそくして「奉」を翻訳したその結果ではない。いずれも正訓字とはみなし難い。一連の用例は、かくて、Ⅲ群が漢語・漢文を基調に表現を成りたてていた、まさにそのことを端的に物語る。

さて残る用例はあと三例、Ⅲ群のうちでも、みな卷一七にある。そのうちの一例は、さきにも闕説したとおり（五六頁）、漢籍に全く同じ表現（傍線部分）がみられる次の例である。

故、獲奉宗廟、不<sub>レ</sub>危<sub>三</sub>社稷<sub>一</sub>。（一七30）

典拠として、漢書あるいは文選のどちらか一方によったのか、また漢書にいくつかある類例の応用であるのか、いずれであるにせよ、漢文の表現としてそれを見る限りは、古訓をはじめとする「たもちうけ」の訓みは当たらない。漢書の類例を引きあいに出せば、当該傍線部の「奉」は「保」と、また「獲」は「得」とそれぞれ換えうる。またもちろん、下句との対応をかんあんしても、そうした換えうる可能性を含むものとして捉えるべきであらう。「奉」は、しかし「保」ではない。意味的にはそれに重なりながら、なお「宗廟」に対して敬意を含みあらわした語、それが右の「奉」であつたらう。

あとの二例は、任那における毛野臣の横暴を伝える記述中に、次のように前後してある。

顧以<sub>二</sub>河内母樹馬銅首御符<sub>一</sub>、奉<sub>レ</sub>詣<sub>二</sub>於京<sub>一</sub>而奏曰、「毛野臣の弁疏」。奉<sub>レ</sub>使之後、更自謨曰、（一七三）

双方ともほとんど同じ行為をあらわしているが、後者の「奉<sub>レ</sub>使」が「奉謂奉送之也」また「奉、送也」などにいう「送」の敬語表現であることは疑いない。そうしてまた「奉詣」は、Ⅱ群の引用する魏志（魏書・三〇・東夷「倭」）の文中に「魏志云、太守鄧（魏書は「劉」に作る）夏、遣使（魏書は「吏」に作る）將送詣<sub>二</sub>京都<sub>一</sub>」（九三）という「送詣」に通う。いずれの「奉」にしても、その行為の受け手、この場合では、「京」がそれにあたるが、すなわち天皇その人のいる地に対して敬意をあらわしたものである。二例だけの、まさに例外的な用例ではあるけれども、ここにもまた、漢語の使用と天皇に対する敬意の表明に積極的な意欲をみせるⅢ群の、その特徴的な姿勢をみることが可能であろう。

#### 四、Ⅰ群の位置づけと全体のまとめ

右のように、これまで取りあげた（一）（四）の各項目をとおして、Ⅱ群とⅢ群とは、それぞれ互いに異なる「奉」の使用を一貫させている。Ⅱ群では、「奉」を日本語（和訓）にもとづく漢字表記として使う点に特徴がある。そうした使用におおむね限定的であったことにともない、用例の数も、またそのあらわれも、極めて低調であった。Ⅲ群は、それとは対照的に、「奉」を漢語そのままに使う。漢語「奉」がもつ多様な意味の多くをそこに見ることができ、まさに「奉」を活用しているといっても過言ではない。Ⅲ群に所属する巻のなかには、たとえば巻一六のように、わずかに三例しか用例のない巻もあるが、それでも、

謹遣<sub>ニ</sub>斯我<sub>一</sub>、奉<sub>ニ</sub>事於朝<sub>一</sub>。(一六七)

右に傍線を付した語は、Ⅲ群に特徴的な漢語であり、あきらかにⅢ群の圏内にある。こうした漢語としての使用が、Ⅲ群に一貫した特徴である。

ところで、これまで保留しておいたⅠ群をみるに、右のように「奉」の使用を異にするⅡⅢ群のうち、いずれかといえ、Ⅰ群は、Ⅲ群に親近をもつ。用例が多いうに、そのなかには、Ⅲ群の用例と一致ないし類似する例が少なくない。

まず(一)の項目では、「奉進」はⅡ群ではなく、Ⅲ群のうちには卷一八以下二〇、二四、二六(2)などにあって、これが漢語的性格の色濃い語であることをさきに指摘したが、Ⅰ群につこう三例(一三三・二七九)ある。(二)の項目の「奉教」も、Ⅰ群(一二四)とⅢ群(一九八)とが共有する例である。また(三)の項目でⅢ群の特徴的な用例であった「奉仕」「奉事」がⅠ群の卷二(七四・九三)にある。同類の語として「侍奉」を使うⅡ群とは、あきらかに異なる。さらに(四)の項目においては、Ⅲ群と同じように、Ⅰ群も多くの用例をもつ。「奉」に下接する動詞の異なり語の限りでも、

卷一 助・迎・出・招禱・造・覬・渡

卷二 避・迎・護・斎・降・送・慰・教・致・助・養

右のとおりⅡ群の比ではない。そうしてそのなかには、Ⅲ群の用例と共通する例が少なくない。「奉助」「奉迎」「奉造」「奉覬」(以上・卷一)「奉迎」「奉慰」「奉助」「奉養」(以上、卷二)など。なおまた、それら以外でも、類縁をもつ表現の例がいくつもある。

宜<sub>下</sub>図<sub>ニ</sub>造彼神之象<sub>一</sub>而奉<sub>中</sub>招禱<sub>上</sub>也。(一三四)



修理神宮、奉<sub>レ</sub>祭<sub>二</sub>神靈<sub>一</sub>、（一九八七）

I群の「奉招禱」は、天照大神を行爲の受け手とし、大神に対して敬意をあらわしたものであるが、その「招禱」も、またIII群の「祭」にしても、行爲の受け手と爲手との関係は、本来、神と人というように、上下尊卑以外ではありえず、したがって、必ずしも「奉」を要しないだけに、その使用には、たがいに共通する積極的な姿勢をみることができ、あるいは付随する表現として、

海神、尽<sub>レ</sub>誠奉<sub>レ</sub>助、如<sub>レ</sub>此矣。（二九五）

盃<sub>下</sub>各<sub>レ</sub>尽<sub>レ</sub>忠、奉<sub>レ</sub>展<sub>二</sub>聖懷<sub>一</sub>。（一九五四）

右のような類似した例もあるが、ちなみに、「忠誠」は、「以<sub>二</sub>清白忠誠<sub>一</sub>、不<sub>二</sub>敢怠惰<sub>一</sub>。」（三〇四〇）とあるとおり、「清白」と同じ臣下のあるべき心意をあらわし、「清白」同様、III群にいくつか用例がある。しかもそれらが「尽<sub>二</sub>忠誠<sub>一</sub>」（一七一三）「久竭<sub>二</sub>忠誠<sub>一</sub>」（一九五二）「翼聲<sub>二</sub>忠誠<sub>一</sub>」（二五二〇）「各<sub>レ</sub>尽<sub>二</sub>丹誠<sub>一</sub>」（同上）などと、I群の「尽<sub>二</sub>忠誠<sub>一</sub>」と同様の表現を成り立たせてもいる。「忠誠」の用例は、表現こそ違うけれども、I群に「此神亦不<sub>二</sub>忠誠<sub>一</sub>也。」（二六〇）とある。「誠」と「忠誠」と、そしてそれをめぐる表現と、さらに「奉」にまであいわたる表現など、そうした一連の一致あるいは類似は、III群と同じように、I群もまた漢語の使用に積極的であったことを物語る。I群に頻出する「奉」は、かくて積極的に漢語を使用したなかでのその一つのあらわれであったに相違ない。さらに「奉」に関連する表現で、III群の用例と類似したものに、次の例がある。

永<sub>レ</sub>為<sub>二</sub>皇孫<sub>一</sub>、奉<sub>レ</sub>護。（二七三）

謹<sub>レ</sub>為<sub>二</sub>国家<sub>一</sub>、奉<sub>レ</sub>置<sub>二</sub>四処屯倉<sub>一</sub>。（一八四二）

「奉」の多用と、そのなかの個々の用例や関連する表現などに、Ⅰ群とⅢ群とでは、右のような一致あるいは類似を示す。その一方で、しかしながら、違いがあることも否めない。たとえば、(二)や(四)の項目に属する用例を、Ⅰ群は、ほとんどもない。また、(四)の項目に属する用例のうちに、Ⅲ群に特徴となった例がないし、関連して、これまたⅢ群に特徴的であった「伏」以下の例も絶えてない。そのうえ、四字一句を単位的なまとまりとして表現を成りたせようとする、Ⅲ群に著しい表現上の特質も、Ⅰ群ではそれほど顕著ではない。こうした違いは、もちろん無視できないが、恐らくそれは、ⅠⅢ群がそれぞれそのあらず事柄や内容を異にしているということと無縁ではなかったはずである。

Ⅰ群は、いわゆる神代卷である。神話の世界であり、それがともかくも日本の固有の伝承をもとに成りたっているという、そのそもその成り立ちからして、発想やその表現の基に日本語があったことは疑う余地がない。漢文であらわすにしても、日本語もしくは日本語による表現や内容等の規制あるいは制約をたえずひきずっていたであろう。漢籍中の章句の利用が極めて低調であるのも、恐らくそのためであらうし、またそのために、漢文的な潤色をこらすことに積極的に出られなかったのではないか。仮定のうえで言えば、もしそうした規制や制約から自由であったならば、その表現は、Ⅲ群の表現により近似したあらわれを呈したのではなからうか。

とはいえ、上に指摘した一致ないし類似をもとに、ⅠⅢ群を一つに括るつもりではない。括ることも可能なほど両群が共通すること、そしてその共通項が漢語そのままでの表現を行なう——消極・積極の相対的な差はあるにせよ——その基調にあること、いまは、その限りしか言えない。それにしても、上述のとおり日本語（和訓）をもとにした表現を積極的に行ない、その基調において古事記に親近をもつⅡ群とは、ⅠⅢ群の双方とも、表現の基調に大きな隔り

がある。結局、書紀三〇巻は三つ（ないし二つ）の群に分かれ、それぞれの群ごとに、その表現の基調を異にしていたということ、これがすなわち結論である。そしてこの結論は、別稿で得た結論にそのまま重ねあわせることができる。（一九八三・一一・九）

註

① 『日本書紀』の句法』『国語国文』第四十七巻第九号。「日本書紀出典考——対表現をめぐって——」『佛教大学研究紀要』第六十五号。

② 亀井孝「古事記はよめるか」『古事記大成』（言語文字篇）三。

③ 上中下は古事記の巻を、また以下の数字およびオウは『古事記大成』本の丁数とその表裏を、それぞれあらわす。

④ 「日本書紀の敬語——『勅』『命』『御』をめぐって——」『佛教大学大学院研究紀要』第十二号。

⑤ 固有名詞の「日奉造」（二九三九）と官職をあらわす「奉膳紀朝臣真人」（三〇三九）との二例を除くほか、「奉」使旨於御所」（二九三九）については、『日本書紀通釈』では「奏」奉「使旨於御所」とするが、岩波古典文学大系の書紀が「奉」を「奏」に改めているのに従い、これも採らない。

なお、単独で使用されている「奉」を単独用字とし、それ以外の、他の語と結合している「奉」を熟合用字として一括したが、熟合用字については、類義的に結びつき、結合度の強い例から、異義的な結びつきの、その比較的緩い例までである。結合度の強弱は、用例によっては見えわめが難しい場合もあり、あくまでも、便宜的な措置として一括したまでである。

⑥ 該当する用例に「奉施」がある。三例あるそのいずれも、巻三〇の仏教関連記述中にあり、しかも行為の受け手を僧とするなど、限定された特異な用例なので、表にはあらわさない。

ちなみに、この「奉施」を、古訓では「おくりたてまつりたまふ」あるいは「おくりまたしたまふ」などと訓む。けれども、「奉施」は、書紀に限っても、

「天皇幸<sub>三</sub>于飛鳥寺、以<sub>三</sub>珍宝、奉<sub>二</sub>於仏而礼敬。（二九三九）

是日、以<sub>三</sub>纒絲綿布、奉<sub>三</sub>施七寺安居沙門三千三百六十三。（三〇四〇）

右のように「奉」と相互に関連するほか、東大寺奴婢帳（寧楽遺文・下巻）などに「上件奴婢等、奉施金光明寺」（75頁）などであり、これが「以前奴婢、於東大寺奉獻如前」（76頁）をはじめとして「進上」「貢上」などとも同様に使われていることなどから、「奉」の限りは、献上の意をあらわすとみる。

⑦ 一書中の「近江天皇」という呼称自体、これに先立って一四七番歌の直前にある標題の「近江大津宮御宇天皇代」をひきついだ、恐らくその略述表記であつたろうし、その呼称をはじめとして、一書は、掲出したとおり、すべて四字の単位的なまとまりから成る。いずれも、そのもとづくところは、あきらかに漢文的措辞にある。

⑧ この間の事情については、「漢文のかたは、たゞありに拙けるは、ひたぶるに古ノ語を伝ふることを旨とせる故に、漢文の方には心せざる物なり、」（「文体の事」『古事記伝』一）、あるいはまた「ヤスマロは、そのような、クハ（いわゆる和訓——榎本補記）から文脈全体をコトバにもとす操作、かりに、それをヨミとよぶならば、このヨミの操作の上に立つて古事記をよむ（理解する）ことを読者に期待しながら、その本文を書いたものと推定される。」（註2の亀井氏論文）などの指摘がある。実際に、たとえば「〇然」などの漢語は、書紀にその例が多い（「忽然」「絶然」「悽然」「惻然」「懣然」「灼然」「愕然」「瞿然」「欣然」などは一部）にもかかわらず、古事記には「自然」（中23才）の一例しかない。

ところで、「古事記の純漢文的構文の文章について」（福田良輔『文学研究』四十四輯）をはじめとして、古事記本文中に漢文体の著しい（いわゆる純漢文体）部分があるという指摘も、一方にある。けれども、それは文体ないしは構文上の問題であり、さきの指摘と抵触しない。

⑨ 第五詔に「天皇大命恐被賜」とあるのは、唯一の例外。なお、宣命の本文は、北川和秀編『続日本紀宣命 校本・総索引』による。

⑩ 註4に同じ。

⑪ 後漢の光武帝即位のさいの「祝文」に「秀（光武帝）猶固辞、至于再三、羣臣劾曰、『皇天大命、不可稽留』。敢不敬承。」（後漢書・卷一上）とあるほか、「恭承天地」（漢書・卷九・元帝紀）、「謹受命矣」（文選・卷八・司馬長卿・上林賦）などがある。

⑫ II群にも、敬意をあらわす語を上接させた例が一例「朕欽承宝命、臨仰区宇。」（二二150）とあるが、これは「大唐之國」の親書の一節であり、親書にふさわしく修辭したものか、あるいはもとの親書をそのまま転載したものか、いずれにせよ、まっ

多くの異例である。

- ⑬ 小竹武夫訳『漢書』上巻には、「奉<sub>レ</sub>けまもる」(34頁)とある。

⑭ Ⅲ群でも漢書の同じ一節を利用しているが、そこでは「子<sub>レ</sub>民治<sub>レ</sub>国、重事也。」「子<sub>レ</sub>民治<sub>レ</sub>国、最宜<sub>レ</sub>称。」(一七13)と改める。そうした改変の特徴については、註1の拙稿(後者)で指摘した。なお、逐一断わらなかったが、この例を含め、出典については小島憲之先生著『上代日本文学与中国文学』上に大きくよっている。

- ⑮ こうした「聞」の用法と、その用例がⅢ群に集中してあらわれることについては、註4の別稿で言及した。

⑯ ちなみに、日本の発想による奉仕に付随する表現では、永続性を強調する点に特徴がある。古事記の「共<sub>ニ</sub>与<sub>ニ</sub>天地<sub>一</sub>、無<sub>レ</sub>退仕奉<sub>レ</sub>」(中52オ)をはじめとして、万葉集には「天地と共に終へむと念ひつつ奉仕し」(176)「遠長く仕へむものと念へりし」(457)「年の緒長く仕へ来し」(332)「ありがよひつかへまつらむ万代までに」(3907)などがある。

- ⑰ この説明の基本は、渡辺実氏「敬語体系」『国語構文論』による。

⑱ この一文は、漢書の「奉<sub>レ</sub>養<sub>ニ</sub>甚<sub>ニ</sub>謹<sub>一</sub>、以<sub>ニ</sub>私<sub>ニ</sub>錢<sub>一</sub>供給。」(巻八・宣帝紀)による。

⑲ それがⅢ群における表現上の特徴であることについては、註1の拙稿(後者)で指摘した。

- ⑳ 山田孝雄「奉為考」『芸文』第十六年第七号。

㉑ この一文は、山上憶良の沈疴自哀文(万葉集・巻第五)のなかの本文「自有<sub>ニ</sub>修善之志<sub>一</sub>、曾無<sub>ニ</sub>作惡之心<sub>一</sub>」についての註としても「謂<sub>ニ</sub>聞<sub>ニ</sub>諸惡莫作諸善奉行之教<sub>一</sub>也」とあり、これが仏典に散見することをふまえて、小島先生(註14の著書373頁)は「やはり有名な語句は記憶によって書かれたものであらう。」と指摘されている。

㉒ 前者は史記の「吏皆送<sub>ニ</sub>奉<sub>ニ</sub>錢<sub>一</sub>三」(蕭相世家)の索隠、後者は周礼の「若遷<sub>ニ</sub>宝則奉<sub>レ</sub>之」(春官・天府)の鄭氏注。なお後者の周礼の一文についての賈公彦の疏には、「天府奉<sub>ニ</sub>送<sub>ニ</sub>之於彼新廟之天府<sub>一</sub>、藏<sub>ニ</sub>之如<sub>ニ</sub>故也<sub>一</sub>。」とある。

㉓ 「誠」の熟語としては、Ⅲ群には、ほかに「誠款」(一七14)「精誠」(一九57)「丹誠」(一九58・二五250)などがあり、Ⅰ群にも「誠款」(二七3)がある。Ⅱ群には「至誠」が二例あるだけで、しかも一例は百済の久氏の奏言(九201)のなかに、また一例は大唐の国書(二二150)のなかにあり、いずれも、そうした外国関連記述の潤色著しい文中に限ってあらわれる。

- ㉔ 小島先生前掲書(註14)。

